
東方幻実神

Erius

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方幻実神

【Nコード】

N5079X

【作者名】

E r i u s

【あらすじ】

普段どおりの日常を過ごしていたはずの主人公が、突然創造神に連れて行かれて、世界神をやらないかと言われ、あることが全力で受けるお話。主人公は新しい世界でどのように生活するんだろうか？

主人公チート、ありきたり、駄文、独自設定（結構多い）

等、いろいろ注意。ついでに、いろいろな小説参考にさせてもらったり。

原作キャラの名前が出るのは5話以降です。めんどくさければ6話

以降からでも問題は……どうだろう。

第0話：プロローグ（前書き）

試験的に投稿してみる

残酷な描画はあるかもしれない

駄文やら初投稿やら注意

第0話：プロローグ

「はぁ……」

全く、どうしてこうなったのやら。

最終的には自分から申し出たんだからこうなるのは当たり前なんだが。

今までの出来事を思い出してみよう。

特に意味があるわけじゃないが……

今日も、特に変わったことは何も無かった。

ただただいつも通りに過ごしていた。

そして布団にもぐりこみ、

起きたら次の日、また繰り返し。

……となるはずだったのだが。

俺はどうしてこんな場所にいるんだ？

さつき寝たばかりのはずなんだが。

周りには何も見えない。

あまりに何も見えなさ過ぎて、目を瞑っているようにも考えられるくらいだ。

……もしかして、夢？

「やぁ」

ん？

「ここだよ、ここ」

きよろきよろしているとそう言われて、視線を向けると妙な格好の人がいた。

真っ白で、ゲームとかでよく見る神のような格好だ。

俺はいつの間にこんな痛い夢を見るようになったんだ。

「勝手に連れてきたからね、説明しよう。
あと、これは別に夢じゃないからね。」

呆然としていると、突然そんなことを言い出した。
というか、もしかして思考読まれた？

そして続けて、

「単刀直入に言おう。創った世界の、神をやってもらいたいんだよね。」

言い放った。

……は？

こいつはいったい何を言っているんだ。

話が飛び抜けすぎだ。話の筋道も糞もあつたもんじゃない。

しかし、なぜだろう。

なぜか、嘘の様な気がしない。

本来なら呆れるところなのかもしれんが、

何故かそれが常識のような感じがしてくる。

気味悪く感じつつ、いろいろ考えてみる。

そんな俺の顔が面白かったのか、少し笑いながら、

「僕は全ての世界をまとめてる神なんだよ。創造神って言えばわかりやすい？」

別に信じてもらおうとか考えちゃいない。どうでもいいからね。今回もいつも通り世界を創ったんだけどね……」

なにやら話し始めた。

要約すると、だ。

世界を創っては見守る日常に飽きてきたので、今回創った世界を別の誰かに任せて見ようということらしい。

別にそれでその誰かの行動を見ようとかいうことはないらしく、ただ単に少しだけでも変化がほしかったようだ。

で、その”誰か”に俺が選ばれた。

……ということらしい。

何で俺だったのか……なんて言っても、偶然で片付けられるんだろうなあ。

「でもね、別に強制するつもりはない。

君がいやだといえれば僕は君を元の世界に返すし、

やると言ってくれればその世界に送って神になってもらう。

もしやるというなら、少し警告しておこうかな。

自分で連れてきていてあれだけどね。」

”その世界に行けば最後、記憶とその他の一部のもの以外は全てその世界のものとなり、元の世界に干渉はできなくなるつまり、今の君は無くなる”

「まあ、時間はいくらでもある。好きなだけ考えてくれ。」

究極の選択だ。選べば最後、後戻りはできない。

もとの平和で変化の少ない日常に戻るか。

新しい何が起こるかわからない変化を求めるか。

俺が出した結論は。

「やる」

変化を求めることだった。

やり残したことなんていくらでもある。友達だったけど。

だが、それを捨ててまで求める価値があるように思えたのだ。少なくとも、今の自分には。

たとえこれが最悪の選択だろうと、構わない。そんな覚悟があった。

「・・・そうかい、では、送ろう。」

本当に良いのか、なんて聞かないよ。警告したからね。

いずれその世界の常識となる事を君の知識に加えておくから、役に立ててくれ。

長く永く続くであろう君の神生に、幸あれ。」

そう言うのが聞こえ、俺はそこから消えた。

そして、冒頭へ戻るわけだ。

ここまできて、思う。

なぜ自分は、あんなに冷静に考えることができたのだろうか。今もそうだが。

そして、何故信じれたのか。こんな話、馬鹿馬鹿しいの一言で崩れるというのに。

呆然とはしたが、それでも混乱することなく全部聞いた。

夢だと思っていたから、というのは無いだろう。

最初以外は、ずっと信じていたからな。

別に俺はいたって普通の高校生だったし、

過去にこれを超えるようなことがあった訳でも無い。あつたら怖い
が。

うーん……

まあ、悩んでもわかるわけない、か。

さて、悩むより先に行動だ。

まずは、周りの確認かな。それと、自分についての確認。
自分についてというのは、もらった知識を確認するため。
それに、身体能力とかも上がってそうだし。

周りの状況について。

草原が広がり、いくらか山や木が見えるが、それ以外はほとんど何もない。

思うことといえば、これが原始の風景なのだろうか？という軽い疑問程度。

以上。それだけ。本当に何も無いのだ。それ以外にどうしろと。

自分について。

記憶……知識を掘り出してみる。

確かに、今までの自分以外の知識が加えられているようだ。

”人類が出現するまで後10億年ぐらい”

……人生の年数とは桁が違うね。

”俺が世界を歪ませたりしなければ、人間と妖怪のいる世界になる。そして、俺の住んでいた世界とほぼ同じものになるだろう。”

じゃあ、元の世界と同じで捉えても問題ないかな。

”霊力、妖力、魔力、神力の4つの力が存在する”

これは掘り下げるといろいろありそうだから、後にしよう。

とりあえず、知識の確認はこの辺に……

いや、まだ重要そうなのが1つあった。

能力。

どうやらこの世界、能力とやらがあるらしい。

持ってるかは人それぞれだが、俺は神なのでほぼ確実に持ってるらしい。

性能チートだったりするんだろうか。するんだろうね。
まあ、確認してみよう。

えーっと、目を瞑り意識を集中させて……

”現実と幻想を操る程度の能力”

……は？

どういう意味だ……

疑問に思いながらも身体能力のほうを調べたところ、格段に上がっているようだ。

全力疾走して山1つ登って降りてみたが、特に疲れは無かった。
岩を殴ってみたら、軽いつもりだったのに粉々になった。
自分でやっておいてあれだが、怖い。

微妙に日が落ちてきた。住居を作らないとな……
住むところがあるのとないのじゃぜんぜん違うだろうし。

……といっても、どうするか。

そうだ、山に洞穴空けよう。

そう思い、山にむかって……

「ていつ」

穴が開いた。こうやって掘り進めて行こうか。

……無事完成と。後どうするかは、明日から考えよう。
どうせ時間はいくらでもあるみたいだからね……

第0話：プロローグ（後書き）

感想、意見あればください。

どうにも初心者すぎて勝手がわかりません……

第1話：自己確認（前書き）

プロローグから続けて投稿。

今回は説明乙につき、設定を知りたい方だけ読むことを推奨。

開幕早々説明ってどうかと思うかもしれないが一応……

矛盾いくつあるかな……

第1話：自己確認

「ふわぁ……んー……」

欠伸をしながら、起きる。

外を見ると、日が昇っている。朝だ。

「さて……どうするかな」

取りあえず、昨日保留にしたことの確認をするか。

まずは、4つの力についてかな。

力には、色があるらしい。

霊力なら白、妖力なら紫、魔力なら黄色、神力なら青
といった感じに。

で、だ。

俺は何を持っているのだろうか？今までの流れだと全部持っても
おかしくないが。

目を瞑り、意識を集中させてみる。

……4色のもやもやしたものが体を巡っているのがわかった。
やっぱり全部あるのかよ。

こいつらは、全部操っているなことができるらしい。
ただ、うまくできることがそれぞれ決まっているようだ。
たとえば霊力。

こいつは、広く浅く、いろいろなことに使えるらしい。

まあどちらかといえば、生活に使うようなことのほうに傾いている
ようだが。

ちなみに……

力

魔力 神力>妖力>霊力

質

神力>魔力 霊力>妖力

安定

神力 霊力>妖力>>魔力

変動は結構あるらしい。

特化して使い慣れれば逆転は可能なだろう。

力で妖力が魔力を超えることも可能だろうし、

霊力より魔力のほうが安定することもあるだろう。

あくまで参考みたいだ。

…… 知識豊富すぎね？

これが常識になるのか……

それからも、いろいろと調べてみた。

それらは全部白紙の本に書いてまとめている。

…… 本がどこからできたって？

それは、能力だ。

この能力、簡単に言えばほぼ何でもできるようだ。
紙は、

”現実と幻想を操り、そこに本をあつたことにする”
見たいな感じで出した。

よくある、わかりやすいチートだ。

だが。

実は恐ろしいことが発覚している。

なんとこれ、何をやるにしても1回ぶつ倒れて

3日ほど寝てなければ回復しないぐらいに力を持つてかれる。

持つてる力を全部注ぎこんでも1日は寝てなきゃならん。

まあ、10億年あればなんとかなるかな、程度に考えているんだが。

ところで、この本、名前無かったな。

どうせ10億年以上生活を共にするんだから名前があってもいいよな。

うーん……

「幻実記にしようかな」

適当にした。

ネーミングセンスなんてないよ。

”記”なのは、日記とかもこれに書いてるから。

日記は、倒れたときも意地で書いた。その後気絶したが。

さて。確認も終わったところで、今度はできるようになったとあることをやってみよう。

能力値数値化……要はステータス表示だ。

この現実を操るといのは、”書き出し”のようなこともできるのだ。

白紙の紙を出す。3日寝た。準備完了。

紙に書き出すことをイメージして……

また3日寝た後、できてた紙を見る。

名前：刃勇 流英
種族：世界神

霊力：8500
妖力：7600
魔力：5000
神力：100

実践したらこんな感じになる。

以上だ。

数値については、今のところ適当。基準になりそうなものが出てくれば従うんだが……

基準ができたなら、もっと細かいものまで表示しようかと思ってる。

神力が低いのは、ほとんど生き物がいないから。

世界神だから、生きていることが俺への信仰になるらしい。

名前についてなんだが、記憶と一部以外は引き継がないというのは本当のようで、

最初にやった時は何も出なかった。

要するに、この名前は自分で付けた。

ネーミングセンスなんてないよ。

こんなものでいいだろう。

さて、後は……

霊力で洞穴コーティングしておこう。10億年間持つとは思えない。

「ん……」

多分できた。見た目に変化がないのでよくわからない。

そうだ、殴ってみよう。

痛かった。これだけ強ければいいかな。

さて、10億年ね……

じゃあ、できることを全てやってしまおうかな。

第1話：自己確認（後書き）

矛盾等あれば報告お願いします。
短すぎるかな……

第2話：10億年（前書き）

今回で10億年ぶつ飛ばします。

もともと長くやるつもりは無かったので。

途中文面が適当になってる箇所があるかも……

第2話：10億年

あれからいろいろとやってきた。

あと2億年もすれば人間が出てくるのではないだろうか。

さて、もちろん訓練はやりまくった訳なんだが。

なんと、やっと能力が自由に使えるようになってきた。

単純なものならほぼ力を使わずにできるようになったし、

一部の日常的に使うものについては力を使わないでもできるようになった。

さらに、ステータスについても基準が見つかった。

まあ、妖力だけなんだが。まだ妖怪しかいないんだよね。

他にももちろんいろいろあったのだが……

まあ、必要になったら話していこうと思う。

「んー……ふぁー」

伸びをして欠伸をして起きる。

いつも通りだ。

周りを見れば書きすぎて大量になってしまった幻実記があったり、全体を見れば見慣れた岩肌だ。

「さて、今日は何しようかねえ……」

うーん……

「ああ、あれ作ろう。」

そう言っただけの柵から取り出したのは、いかにも作りかけという雰囲気を出している刀だった。

軽く説明すると、大体1億年ぐらい前から手を付け始めたものだ。

いずれ自分の力がでかくなりすぎて隠すのに限界が来るだろうから、それに耐えうるものを作りたかったのだ。

簡単に言えば、自分の力を封印するもの、かな。

封印といっても、出し入れが自由な緩いものだけだ。

能力で出せばいいと言われるかもしれないが、

暇なので材料だけ出して後は自分で作りたかったのだ。

能力に頼りすぎるのもよくない気がするしね。

「散歩にでも出ようか」

作業を途中で切り上げて、散歩に行くことにした。

近くの妖怪などとはある程度友好な関係があるので、そいつらと話したいって言うのもある。

洞穴を出て周りを見渡すと、早速第一妖怪発見。

知ってる顔なので普通に話しかける。

「よう、なにやってんだ？」

「ん、ああ、お主か。実は、家の材料が足りんだ。

仲間の妖怪から教えてもらって作りたいのだが……」

家をその仲間の妖怪に教えたのは、俺だ。

まあ、すごい簡単な、近くまで来てなんかあるね程度のものだが。

「その家教えたの俺だし、手伝おう。暇だから散歩してたんだ。」
「おお、それは助かる。なんせこんな体なもんで、うまく木が切れ
んのだ。」

この妖怪、見た目は狼のような感じた。

しかし、顎がそこまで強いわけではないようなので、苦勞している
のだろう。

「ふー……」

「ああ、助かった。ありがとよ。」

「別に構わんって。時間は有意義に使えば一番いいだろ。」

作業が終わったなら、ちょうど日が沈みかけていた。

さて、帰ろう。

そういえば、俺は一応神だ。

神といえば神社だと思う。少なくとも俺はそう思う。

洞穴を出て、建ててみようかな……

そう思いながら、寝た。明かりがなく、暗いので夜はすることが無
いからだ。

次の日、俺は洞穴を出て神社の建設にかかることにした。

木や石は、自分で集めた。寝なくてもいいので比較的早く集まった。
さて、後は組み立て……と言いたいのだが、生憎神社の知識が無い。
ということ、設計図を書き出すことにする。

これは能力で行うのだが、結構便利だ。

紙を用意し、建物をイメージしつつ紙に念じる。

するとあら不思議、設計図がそこに。

しかしこれ、半端なく力を使うので1日ぐらい能力が使えなくなる。

まあ、問題ない。

さて、そんなこんなで神社完成。自分で建てたにしては、大分良い出来ではないだろうか。

あとは洞穴から荷物を全部持つて……来ようと思ったのだが、あまりに幻実記が多すぎたので、本棚を作って洞穴に封印しておくことにした。

複雑に術式を組んで、完成。時間があればこのぐらい簡単だ。なくすのはもつたいないので封印だ。

いずれ誰かが解くかも知れんが。

つと、忘れるところだった。

この時代にしてこの神社は怪しすぎるので、能力で隠しておく。幻想を操って気配とかを消すだけの簡単な作業だ。もちろん自分は対象外。

それから、特に何も無かった。

……いや、1つだけあるが、まあそのうち話そう。

ぐだぐだと修行や刀の作成などをやり続け、およそ2億年ほど。

やっと、人を見つけることが出来た。

そのときの俺は、うれしいやら何やらで泣きそうだった。

なんせ、自分を除いて久しぶり（10億年ぐらい）に人型を見たの

だ。

何かしたかったが、抑えて神社へ帰らざるを得なかった。
このテンションで接触したら間違いなく力を抑えられないからな。

それから、ほぼ毎日散歩ついでに観察するようになった。

ストーカーとか言われそうぐらい。というか明らかにストーカー。
対象は村だけど。

でも発展していくのを見るのは楽しい。

まあ、観察もいつかは感づかれるわけで。
別に隠れてるつもりは無かったのだが。

ある日のこと、怪しいと思ったのか一人の女性がやってきた。
白い長髪で、時代に合った質素な服を着ている。

「何をやっているの？」

「特に何かしてるわけじゃないが、強いて言えば観察？」

「何で観察なんて…… あなたも人なんだから入ってくれば良いのに。」

「いやね、ちよいと事情がありました。」

「…… まあいいわ。ここにいるのはいいけど、変なことしないでよ？
あなた結構怪しまれてるわよ。」

そう言つて、帰っていった。

人といわれた理由だが、

変に争いたくないので人に合うときは霊力のみ、

妖怪に合うときは妖力のみ出している。

直接感じることは出来ないが、雰囲気というのか、
それが変わるのでこうするとそれっぽく見えるのだ。

さらに、容姿自体は変えていないが、人間からは質素な服の人間、妖怪からは人型のぼろぼろな服の妖怪に見えるようにしている。感覚的にも”同一人物と感ずることが出来ない”ようにしてあるのだ、

並大抵の奴にはばれないだろう。上級妖怪とか出たら知らんが。

「…………おとなしく帰るかね。」

多少怪しまれてる程度なら問題なかったが、さっきの言い方だとほぼ間違いなく警戒されているだろう。そうになると、さっきの女性などに迷惑がかかることは必至だ。しょうがないので、今日で終わりにしよう。

家に帰ると、狼……正確には、狼のような妖怪がいた。

こいつは、わかるかもしれないが2億年前ほどにいたやつだ。なぜいるのかはいろいろあったのだが……

今回はここまで。

第2話：10億年（後書き）

矛盾等あれば言うてください。

最後は、話を続けてもよかったのですが長くなるので、次にします。

第3話：狼と世界神（前書き）

やたら意欲が沸いたので、1日で仕上げました。
が、あいからわずの文章な上に、矛盾たくさんあるかもしれません。
設定詰め込んだので。

第3話：狼と世界神

狼のような妖怪。名前は源想という。

これは俺がつけた名前だ。あのとき名前なんて無かったしな。確か初めて出会ったのは、2億年前のあの出来事の少し前だ。

俺が洞穴近くの森をふらふら歩いていると、突然後ろから衝撃が来た。

倒れそうになりつつも後ろを見ると、狼みたいなのが牙をむいていた。

できれば話し合いで解決したいのだが……

「いきなりどうしたんだ？」

「ここはわしの場所だ。素直に帰るなら見逃してやる。」

「うーん、この奥に行きたいんだが……」

「だめだ、どうしてもというならわしを倒すんだな」

ふらふらしているとはいえ、一応目的地はこの奥だったので困る。

今まで負けたことが無いのだろうか。それだけの自信が感じられる。話し合いは無理そうだ。こうなれば、戦うしかないか。

「わかった、じゃあ倒してやる」

強さを知りたいので、軽く妖力を使って剣を創る。

そして、そのまま振り下ろす。しかし、斬れたのは風だけで。

「遅いわ」

後ろから飛び掛ってきた。弾き飛ばし、もう一発入れる。今度は入った。が、そのまま剣を折られてしまった。剣を消し、後ろに飛ぶ。いた場所には小さなクレーターがあった。

「あぶねえな……じゃあ。」

今度は強めに妖力を使って剣を2本創る。両手に構え、斬る。風を斬っても、斬る。斬って、斬って、斬って。

……当たった！

そのまま斬り続ける。

そして、妖力が引いてきたところで攻撃をやめる。殺しはしない。一応世界神だし。

「……なんだ？なぜ止める？」

弱弱しい声が聞こえる。

「だって倒せばいいんだろう？もともと戦う気は無かったしな。」

「……面白い奴だ、お前みたいなのは初めて見たわい」

いやこいつ結構強いぞ。力は全力で抑えてるけどここまで戦ったのは初めてだ。

「いや、あんたも結構な強さだ。……よっと」

「っ……何をする」

「まあまあ、あんたは寝ててくれ」

何をしているかというと、担いでいる。
あんまり死んでほしくないからな。

「……お、目が覚めたか？」

「……どこだここは」

「俺の家だ」

「……家？」

ああそうだ忘れてた。まだ家なんて無かったね。

「まあ、気にすんな。傷は大分治ってるから、もう帰って良いぞ。
出口はあつちな。」

「……そうか。礼は言わん。じゃあな」

そついうと、風のような速さで帰っていった。

……あ、森の奥行き忘れた。

それから何度か会って、すっかり親しくなった。
あのときの口調にしては、結構いいやつだった。

で、それから100年ぐらい経った頃だ。

わしはいつも通り森を歩いていてた。

今回は食料を取りに行く。

果物のなる木はほぼ決まっているので、そこに行つてとるだけだ。

無事にたどり着いた時、異変に気がついた。

明らかにおかしい感じがしたのだ。それも、強大な。

その方向に向かうと、誰かが倒れていた。……よく見ると、あいつらしい。

近づいていきたいのだが、既に押しつぶされそうなのぐらいの力がわしにかかっていた。

……あいつには、わしから吹っ掛けたとはいえ、命を助けてもらった恩がある。

今こそ、その恩を返すときではないか？

そう思い、一歩一歩踏み出す。

さきほどの場所からあまり進めていない。力が、強すぎる。

気を少しでも抜けば、たちまち押しつぶされて消滅してしまいそうだ。

ここまで着たからには、後には引けない。

せめて……せめて、力が弱まれば……

”ありとあらゆるものを鎮める程度の能力”

……？

なんだろうか、急に弱くなってきた。
何はともあれ、急いで助けなければ……

視点Change：源想 流英

「……………」

そんな間拔けな声を上げて起きた。いつもの寝室だ。

「やつとおきたか！」

隣には、あの狼のようなの（以下狼）がいた。
いったい何が……
ん？

”現実と幻想を司る程度の能力”

……能力が、変わった？
啞然していると、狼が。

「全く、面倒なことになってくれおって」

何のことだろうか。

「……………」何が？

「記憶がないのか……………」まあいい、とりあえず寝てくれ。そして……
っ、力を抑えてくれ。」

……………、言われて気がついた。

力を抑えていない。
力を抑えると、

「はぁ……やっとか……鎮める、のは大変、だ……」

倒れる。

「えっ……えっ？」

よくわからないので、いろいろ調べてみた。
どうやら、この能力になったことで、世界の全ての記録が俺に入ってくるようだ。

で、そんな膨大なものを俺の頭で処理しきれるはずもなく、パンクしたみたいで。

力が抑えられてなかったのはそれが原因だろう。

しかし、それだけでは今自我が保ててる理由がわからない。

一番可能性が高いのは、狼が力に中てられすぎて力が膨大になった、もしくは能力に目覚めただ。

さっきの発言からして、おそらく後者だ。

能力が鎮めることなら、今までのことに説明がつく。

まず、神社が無事なこと。

本来の俺の力を当てたら、結界があるとはいえ木っ端微塵もいいところだろう。

しかし、それが無い。おそらく、無理やり鎮められていたのだろう。次に、自我。

これも狼が倒れながらも能力で鎮めているのだろう。ありがたいな。

こいつが最初から消滅しなかったのは、それだけ強かったのだろっ。さずがだ。

今の俺がやるべきことは……

入ってくる情報を制御し、安定させることだろう。

なんとか制御に成功した。まさか1年かかるとは……
狼には、いてもらった。というか、狼のほうからいた。
自分のことについては、ある程度はなしておいた。

「やっと、か。大変だったわい。」

「すまんすまん、俺もこんなになるとは……」

「……ところで、この力、どうしてくれる？」

実は、最初に加えて、近くに居続けたので狼の力がすごいことに
もちろん霊力やら魔力やらも混じっているので、もはや妖怪じゃない。
い。

「悪いけど、自己管理してくれ。妖力以外を鎮めて戻ってもいいし、
別に俺についてきても構わん。どうせ、その力じゃ不死に近いから
な。」

「なんとも無責任な……まあいい、そういうなら付いていこう。
実を言えば暇だったんだ。もう長い間生きているからな……」

ということ、狼同行決定。

「じゃあ、お礼に名前をやるっ。」

「名前？」

「自分の呼ばれ方。ちなみに、俺は流英って言う。」
「ほう……」

実は、もう考えてある。

「……」源想だ。これからは、そう名乗ってくれ。気に入らなければ、変えても良いが。」

「……ありがとう、そういわせてもらおう。」

こうして、実は源想がいなかったらすごいことになった事件は終わった。

こういう経緯があつたのだ。
いくらか説明は省いたが、大体こんな感じだ。
ちなみに、今はもう完全に不死になった。

そして、今まで神がいつぱいいいたが……
こいつは、俺が認めた神第1号だ。
特に表に出ることはないがな。

第3話：狼と世界神（後書き）

おかしい点等、どんどんください。
今更ですが、展開が速いのは仕様です。
源想は、流英の能力の半分を掬ったもの。
こっそり相棒宣言だったりします。

第4話：決心（前書き）

注意はいつも通りです。

ほぼ勢いで書いたため、おかしいかも（以下省略）

第4話：決心

「なあ源想」

「なんだ」

「さっきの話は、本当か？」

「……嘘だと思ふなら、見に行けばいいじゃろ。」

「お前の口調って安定しないよな」

「それはどうでもいいじゃろ」

さっきの話というのは……

いつまでかやっていた、観察していた村についてだ。

話によれば、その村は発展「しすぎた」。

その技術力で、月に行き、この地球を破壊して行くつもりらしい。

掲げている理由は、妖怪と地球という「穢れ」をなくすため。

この世界は俺の体の中のようなもので、そんなことされると非常に大変なのだ……

ああ、困った。

今、村に侵入している。

詳しいことを聞いてみたところ、

まず月に移る「上の奴ら」が月へ。

残りは地球で妖怪と全面戦争を仕掛けるようだ。

さらにその「上の奴ら」がいるところへ侵入して入り込んで盗み聞くと、

残りには内緒で月から地球を破壊するらしい。

嘘にしか聞こえないが、いろいろと見て回った限り本当なのだろう。いつの時代も、上の奴らつてのは余計なことする奴らばかりみたいだな。

さて……

どうするこの状況。

簡単に言つと、ばれて捕まった。

そして、目の前にはあのときの女性が。

「何しに来たの？」

「いやあ、発展した村があると聞いてやってきたんですよ。

そしたら、ここだったとは……」

「……あなた人間なのかしら。

今普通の人間なら気絶するぐらいの光線をあてているのだけど」

なんだと？

確かに、後頭部に違和感が……

これはまずいかも知れんね

「妖怪と戦いすぎも「終わりました」ん？」

「ご苦労様。あなたを調べさせてもらったわ。

……は？」

何故か啞然とする女性。

「種族不明、能力計測不可……？」

ああ、確かに普通の奴だと計測無理だろうなってそういつことじゃ

なくて

「しかたない……」

誤魔化すのはあきらめた。

「全力ぜん……1割開放！」

力を1割開放する。全開なんてやったらこの辺一体が消滅するわ。

……2億年前のあれのときは流れてくる情報やらが一応防いでたのかな。

意図的に防いだわけじゃないからめっちゃ漏れてたみたいだが。

全員気絶したのを確認し、帰る。

本当はやりたくなかったんだがなあ……

「つてことがあった。」

「やりすぎじゃ阿呆め。」

そんなやり取りはともかく、あとはどう対策するかだが……

「できれば両方に生きてもらいたいんだが……」

「無理じゃろう。」

どっちも既に警戒態勢、下手に刺激を加えればすぐにでも始まるかもしれないのう。

無理に生かして後々面倒になる可能性もあるんじゃないぞ？」

「うーん……」

……ここまできたら、もう考えを改めるしかないのだろうか。

今の俺の考えは、全ての生存。普通は理想でしかないが、俺には出来る力がある。

しかし、そうやったとして戦争が無くなる訳じゃないだろう。むしろ悪化するかもしれない。

おそらく本来考えるべきは、平和。

戦争にかかわる者を殺し、大規模なものを終わらせる。永遠とは言わずとも、しばらくは平和になるだろう。

しかし、しかしだ……

俺はもともただの人間の高校生であり、その心を忘れたことはない。

しかし、それをやるならばそれを捨てないとならない。

「……のう、流英よ。」

「なんだ？」

「お主の話によれば、もう既に前の人間ではないのだろう？」

「……心読んだ？」

「顔に出すぎじゃ。わしじゃなくてもわかるわい。」

「うーん、そうなんだけどね……」

「わしから言うのはあれじゃが、今はこんな時代じゃ。」

お主のもともとの常識は通用しないじゃろう。

……間引き、という言葉を知っているじゃろう？

悪いものは刈り取らなければならない。そうしなければ、影響はどんどん広がっていくからのう。

お主が普通の人間や妖怪だったなら別だが、

神となればそれはしなければならいのではとわしは思う。

これを聞くか聞かないかはお主自身じゃ。

別にお主がどちらを取ろうと反対せんよ。

……ああ、喋りすぎた。少し休むぞ。」

そこまで行つて、のそのそ自分の部屋まで行く源想。

本当に、どうしたものかな……

数日経った。

俺の出した結論は、もとの精神を捨てること。

もう10億年生きてきた身だ、難しいことではない。

これを期に、元の世界とは関係を絶とうと思ったのだ。
ずるずる引つ張るのはよくないだろうし。

本来ならもう少し悩むのだろうが、

何故か相変わらず持っているあの「冷静さ」が働き、数日で結論が出た。

別に能力関係ないし……本当に何なのだろうか。

「なあ源想」

「なんじゃ」

「明日なんだろう？」

「そのようじゃ」

「……明日、戦場のだ真ん中に突っ込むからな」

「ほう、そういう結論か」

そう、明日。

戦闘の意思があるもの以外はどこかへ飛ばし、ど真ん中へ行つて力を解放。

それだけ。それだけで、この戦争は終わる。

「……寝るか」

「寝坊するんじゃないぞ」

「わかってるって」

「うーん、これは……」

そこは、まさしく戦場。戦争の真っ只中のようなのだ。

レーザーが出てくる銃を持った人間と、

殺気を漲らせた妖怪が戦っている。

数は軽く見ても合計100万はいるのではないだろうか。

戦闘の意思が無い奴の転送は済ませた。

あとは、だ。

「お前ら……」

降り立つ。力を少し解放しているので全員がこちらを向く。

「いい加減にしな！」 全力全開”」

瞬間、ものすごい量の力が俺から解き放たれる。

あれ、前までこんなに無かったと思うんだが……

周りを見ている。ちらほらと、生き残っている奴がいる。

開放をやめ、そいつらの元へ行く。

殴り、蹴り。不良のようだが力の桁は違う。

全て終わった後、俺も倒れた。

視点Change：流英 源想

「全く、面倒なことになってくれおって……」

これを言うのは、2回目じゃろうか。

流英のやつめ、全力出すから外に漏れないようにしてくれ
なんて言いおって……やったが。

もう、へろへろじゃ。こいつの全力が強すぎて抑えるのに全部持つ
てかれた。

駆けつけてみれば、その辺一帯は文字通り何もなくなっていた。
ただ唯一、流英の倒れた姿があったが。

「無茶しすぎじゃ。全力開放して力が持つわけ無いだろうに……」

寝ておれ。わしも寝る。

そう付け加え、倒れた。

数千年後、人間が元通りに生活し始めた。

元通りといっても、最初からやり直したようなものだが。
過ぎた技術は無くなり、便利とも不便とも言える生活だ。
そんな中、ある村では1つの伝説と祠があった。

” 森の中、倒れた人と狼あり ”

第4話：決心（後書き）

どうでしたでしょうか。よろしければ、感想や意見をお願いします。
今回で、原始・古代編終了です。

もともと長くやるつもりはなかったのです。

……よく考えたら、原作キャラの名前出てきてませんね。

まあ、次回以降ということでは。

次回は……いつから始まるだろう。

第5話：住居の神社（前書き）

後半はノリで書いた。反省はしていません。

第5話：住居の神社

「……んう」

目が覚めた。

ここはどこだろうか？

周りには何も見え無い。まるで、最初に創造神にあったときのよう
だ。

しかし、感覚からそうではないとわかる。

なんというか、力が抑えられているような感覚だ。

記憶が曖昧だが、封印でもされたのだろうか・・・

まあ、封印なら大体は解ける。

ということとで術式を見てみる。

「……妙に簡単だな、これ本当に封印か？」

呆れるほど簡単な術式だ。だがまあ、そのほうが助かる。

「……ほい」

解いた。その瞬間、その何も見えない空間が崩れていって……
気がつけば、草むらの上に寝ていた。

なんとなく居心地が良いので、記憶を整理してみるか。

戦争。人妖大戦争とでも名付けようか。

あれのど真ん中で、俺は全力を出した。

生き残りには蹴りや殴りをお見舞いしてやった覚えがある。

その後、徐々に意識が無くなっていった。

今思えば、あんな時間全力出したら、そりゃ意識も飛ぶわな……

ところで、何年ぐらい経ったのだろうか。

神力のせいで神かなんかと思われて（間違っではないが）
祠が経つぐらいだから、相当経ったと思うが……
能力で調べるか。

……あれ？

おかしい、能力が使えない。

もしや……

……やっぱり、力全般が減っている。

能力、楽になったとはいえ消費する力はほとんど変わってないんだ
よな……

あの時代にいた中級妖怪と同じってところか。

うーん、弱った。いろんな意味で。

そういえば、源想はどうしているのだろうか。

あいつのことだから、あの後駆けつけてきてもおかしくないが……

「……ん？」

気にしていなかったが、祠からまだ封印の気配がする。

まさか……

「ほいっと」

それを解いてやる。

すると、祠から光が出てきて……

俺の隣に、狼の形を作った。

「やっぱりか……おい、起きろ」

「んー……なんじゃ」

「もう十分寝ただろ」

「……おう、5000年経つとるわい」

え、そんなに寝てたのか。いや厳密には封印だけど。

「後ろの祠で封印されてたんだよ、簡単すぎて封印する気があるんだかわからんが」

「ふむ……まあ、調度いいんじゃないかの？」

「まあ、確かにあのまま野ざらしにされ続けるよりは良いけど」

あまり想像したくない。

「そういえば、力がすごい減ってるんだが、お前はどうか？」

「……ああ、わしもじゃ。木1本倒せそうに無い」

「弱りすぎだ」

「わしに言っな」

多分、力が回復しきらなかったのだろう。

「……そうだ、神社はどうなった」

「お主の住んどった家か？」

「ああ。……あっちか」

「まだ残っておったか」

「5000年で風化するほど弱い保護をかけた覚えは無い」

じゃあ、歩こう。

着いた。そこには確かに、あのときのままの神社があった。

隠蔽の保護は無くなっているようだ。

……ん？

「誰かいるみたいだ。空けすぎたから、どっかの神が居座ったか？」

「ふむ……」

「まあ、会ってみるか。源想は待機してくれ。何なら寝とけ。お前の力じゃ寝てても勝てる奴いないだろ」

鳥居を抜け、本殿の横にある住居へ。

いるならここだろう。知識がないので、これでよかったのかは知らないが。

もともと自分の住居なので遠慮なく障子を開く。

そこには、女の子が居た。少女と言うべきか。

金髪だが頭に変な帽子をかぶっていた。

……とは後から思ったことで。

「……は？」

「へ？」

少しの間の沈黙。

「……失礼しました」

「待てー！」

何かの間違いだと思うので閉め……ようと思ったら袖を掴まれた。よく見れば、神力を纏っているではないか。神だったのかよ。

「お前だったのか」

「どつという意味！？」

いや探してる奴がお前だったのか的な意味で……が、念のため聞く。

「あんたが、ここの神様？」

「そうだよ！っていうかお前誰だ！」

「落ち着けよ。俺はただの人間だ」

「えっ？」

「えっ？」

なんだこれ。

「……うわあああ、姿見られたああああ」

「えっ？ちょ、え？」

横から見れば女の子泣かせた大人だ。精神的にくるからやめてほしいんだが……

「信仰が無くなる」

「いや、あの、嘘だから、俺も神だから」

諦めて神だと言う。

という事で神力開放。

「……うえ」

と思ったら気絶した。ありや、神力だけは溜まりまくってたのか聞きたいこと聞けなかったな……とりあえず、寝室まで送るか。

視点Change：流英 少女

暇だなーとごろごろしていた時だ。
突然、近くの障子が開いた。

「……………は？」

「へ？」

何事かとそんな声を上げながら見ると、銀髪で背の高めな男が居た。

「……………失礼しました」

「待てー！」

障子を閉めて帰ろうとしたので袖を掴む。
すると男はこちらを見て…………

「お前だったのか」

「どういう意味！？」

意味がわからない。無意識にそんな言葉が出てきた。
半ば呆然としていると、

「あんたが、ここの神様？」

「そうだよ！っていうかお前誰だ！」

「落ち着けよ。俺はただの人間だ」

「えっ？」

「えっ？」

いきなり神が聞かれ、それで意識を取り戻し、

お前誰だと聞き返すと人間だといわれた。

……人間？え、人間……

「……うわあああ、姿見られたあああ」

「えっ？ちょ、え？」

こんな姿だから威厳とか見られたら無くなっちゃっ……

「信仰が無くなる」

「いや、あの、嘘だから、俺も神だから」

……へ？もう何がなにや」

うっ！？つぶされる……

そうして、意識を手放した。

第5話：住居の神社（後書き）

感想、意見等よろしければお願いします。

特に矛盾とか出るような話じゃなかったと思いますが……

最後に少女が気絶したのは、神力だけは信仰のおかげですぐ回復していたから。

むしろ上がってる。

ちなみに、少女が誰かはほとんどの人がわかると思います。

おそらくその想像通りです。

第6話：初依頼（前書き）

流英が依頼を受けに村に行きます。
こついうの、なんていうんだろっ……

第6話：初依頼

「んー……」

「お、起きたか。」

「んあ……あ、さっきのやつ！」

「さっきはすまなかった」

「え、う、うん」

さつさと、質問を切り出そうか。

「いくつか質問いいか？」

「そ、その前にこっちから」

「いいぞ」

「何しに来たの？」

「来たというか……帰ってきた？」

「……はい？」

「いやだから帰ってきたんだって」

「この神社のもともとの持ち主ってこと？」

「その通り！」

おう、言葉を失ってる。

そりゃ、あつたから長いこと住んでたのにいきなり持ち主だなんて意味わからんもんな。

勝手に住むって言うのもどうかとは思うが。

「できれば返してもらえるとありがたい」

「じゃあ、なにか証明できるものはある？」

うーん……

「この部屋の隣の隣の部屋の隅に横に長い引き出しが2つある棚があったと思う」

「……あるよ」

「それ、下の引き出し開かなかっただろ？」

「うん」

「その引き出しは、俺にしか開けられないようになってる。つていうのじゃだめか？」

「……付いてきて」

「おうよ、まあ俺なら目を瞑っても歩けるが。」

その部屋に到着。

見慣れた部屋だ。ほとんど内装はいじられてないみたいだな。

「んじゃ開けるぜー、よっと」

放置しすぎて開けにくかったが、なんとか開けることが出来た。

「あつと、気をつけるよ？今出したもの、引き出し含めて触ると力を吸い取られるぜ」

無駄な防犯対策。

「うーん、相変わらずだなあ、調度いい、使おうか」

その手には、あの刀。3億年かけて作り上げた刀。

斬るためでなく、力の封印用に作った刀。

使おうと思ったのは、中途半端な力しかないのなら、

いつそのこと完全に回復するまで一般人として生活しようという考

えからだ。

どこか村で依頼を受ければ暇はなさそうだが……

「何するの？」

「こうするのさ……うっ」

「え！？ちょ、馬鹿、何を……」

何をしたかというと、刀を腹に刺した。以上。

特殊な加工がしてあり、これで付いた傷は全部自動修復するようになっている。

痛いもんは痛いんだがな。確実な方法がこれしかなかった。

そうこう考えるうちに、力を半分ぐらい吸い取られた。

もう、一般人レベルの力しかない。

「……………っ、こんな感じた。

この刀に、俺の持ってた力を込めた。

……触るなよ？死ねるぞ？」

手を伸ばしていたので警告する。割と無駄にしっかり防犯対策があるので危ない。

刀の説明してどうするよとか言わないで。

「まあこんなもんだ。まだ足りないなら何かするが……」

「もういいわ。初めに来たとき神力の残りみたいな感じだし、その感じもあなたの神力と同じ感じだったし」

「なんだ、そうだったのか」

じゃあやる必要はあったのか聞きたかったが、やめておく。
すると、

「1つお願いしていい？」

「ん？」

「……この神社住んじゃダメ？」

「理由を頼む、それによる」

「実はこのすぐ近くに村があつてね、そこを統べる神なんだよ。

で、その村にはもうこの神社が私の居るところって定着しちゃってね……」

「……なるほど、ならいい。相当変な理由じゃない限り断るつもりはなかったが」

「よかった……」

という訳で、同居決定。

変な意味はない。

……そういえば

「そういえば名前は？俺は刃勇流英って言うんだが」

「洩矢諏訪子だよ。よろしく」

「ああ、よろしく洩矢」

「諏訪子でいいよ。その呼び方だと村人と同じになっちゃう」

「一応今は人なんだがな」

「どこに神力もった人間がいるのよ。せめて隠してから言ってほしいわね」

「忘れてた」

「忘れんな」

忘れかけてた源想を連れてきて、適当に修行する。
力が少なすぎて出来ることが少ないな……

「何やってんの、流英」

「昔やってた修行の一部だ。力がなさ過ぎて出来ることが少ない」

「じゃあなんで刀に力込めたのさ」

「中途半端に持つてるより完全回復するまで一般人でも演じてみようかなと」

「あの馬鹿でかい神力が中途半端？」

「あれは別だ。信仰があるから勝手に溜まる。」

「どっちにしる敵に回したくないね……っていうか、なんで神力以外も多く持つてるのさ」

「秘密だ、自分で考えるんだな」

「あーうー、そういえば能力持つてるの？」

「それも秘密だ」

「あーうー……」

そのあーうーに意味はあるのだろうかと思うがどうでも良いの言わない。

とまあ、そんなことを話していると……

「洩矢様ー！」

「ん？誰の声だ？」

「村人の声だよ。何かあると来るんだ。ちよつと行つて来る」

「……その姿で？」

「いつも村人に会うときはもっと怖い姿に見えるようになってるんだよ

っていうかあんまり言わないで……」

少し涙目になっていたが、そのまま表のほうへ向かっていった。

帰ってきた諏訪子によると、ちかくの祠の封印が解かれたというものだった。

……俺らのだよな。

「仕方ないから見に行くよ、付いてくる？」

「行こう、暇だしな」

それを隠して、行く。

ちなみに、源想はあの場所で寝てた。本当に寝やがった。

「……おお、多いな」

「そうでしょう？結構自信あるのよ」

「そつえば、何するんだ？」

「出てきた奴の力を辿ってどこにいるか調べるのよ」

「……それ俺だぞ」

「え？」

「いや、今朝封印解いて出てきたんだよ

……ってかあれ封印なのか？簡易すぎる」

「……そうなの？簡単なのは、封印よく知らないから……」

「そつだ。封印の術式教えてやるつか？」

「……できれば」

ここでネタばらし。隠そうとして半刻経ってないんだが……
引きずると面倒になりそうだから仕方ない。

「じゃあ、別人だつてことにしとくわよ。得体の知れない奴に恐怖を抱かない人間はいないだろうし」

「構わん」

諏訪子がいろいろやっている間、俺は姿を消しつつ後を追っていた。あんまり目立ちたくないからな。

結局、諏訪子は他の国に行ったから心配ないだろうということにしたようだ。

そんなんでいいのか神様よ。俺も神だし原因も俺だが。

「ちょっと村に行ってくる」

「なんだよいきなり？」

「どうせ暇だし、依頼でも受けてこようかと。」

「ふーん……まあ、いいんじゃない？結構悩み抱えてるの多いみたいだし。」

私もなんかしたいけどあんまり動けないからなあ……」

「……ところで、その威厳のない喋りはどうにかならんのか？今更だが」

「これが素なんだよ、他に話せる奴に素で喋れるのがいないから我慢してよ」

「まあ別にそういうなら仕方ない……というか、他に知り合いの神とかいないのか？」

「……言うなよう」

「ははは」

適当に返事をし、そのまま村まで行った。

依頼を受けるとは言っても、別に紹介するところがあるわけじゃないさそうなので、

村から少しはなれて家を建てた。

少し離れてといっても村から十分見える距離だが。

1日かかり、一回神社に帰ったが問題はない。

適当に整備をしながら暇をつぶしていると、爺さんが入ってきた。

「ちょっと護衛を頼めないかの？」

「構いませんよ、少し待っててください」

建て終わって一刻経ってないんだが……

まあ、暇なよりは良いだろう。

内容はこうだ。

なんでも、森の向こう側に竹林があるらしく、そのの筈を取りに行
くらしい。

……そういえば今春だね。

言われた時間に行くと、確かに爺さんがいた。

「おお、お前さんが護衛かの？」

「そうです、よろしく願います」

「そんな敬語はいらんよ、よろしく頼む」

村を出て森を抜けて、その竹林が見えてきた。

「へえ……こんなところに竹林があつたのか」

「まあ、この辺に住んでる者はおらんから知らなくても仕方ないじ
やろうな」

早速竹林突入、爺さんが見つけて掘りまくる。
・・・うまいな、何年やってきたのだろうか。
取り合えず見よう見まねでやってみる。

「あ、そいつはだめじゃ、長すぎる」

結構注意されつつも、6個取れた。

その間に爺さんは20個以上取ってた。……すごいな。

さて、村まで帰るとしよう……

「ありがとうな、助かった」

「とんでもない、むしろこちらが感謝したいです」

往復の間に蹴散らした妖怪や獣は8体ほど。

俺は、もとの報酬はもちろん、なんと自分で取った筈は持つて
つていいと言われたのだ。

それなりの妖怪が出てきてたら言わないかもしれないが、
今回は全部弱かった。

「わしは2日に1回ぐらい取りに行こうと思ってるんじゃ。また依
頼するぞ」

「ええ、是非やらせてもらいます。ありがとうございます」

さて、帰るか。

ということで仮住まいに適当な札を建てて、帰る。

気がついたら夜だったのだが、帰ったら諏訪子に怒られた。
いつ飯を作るか考えていたからだそうで。

別に俺は冷えててもいいんだが……

と言ったら殴られた。結構痛い。

第6話：初依頼（後書き）

意見、感想等よろしければお願いします。

依頼とかこの時代にあるのかわからないけど気にしてはいけない。

追記：現在・・・を……に置き換えています。ついでにちょっと文面いじつてたり。

第7話：神社と遠出（前書き）

本来は別々だった話を、短すぎたので1つにしました。
もしかして初めて流英の容姿言ったかな？

第7話：神社と遠出

とある村の近くの神社の本殿。

そこに、銀色の長髪で青い瞳の男が居た。

……まあ俺なんだが。

改めて自分の姿を見てみると、結構すごいな。

ところで、今の文でおかしい点が1つある。

前まで神社の境内に住居みたいなのがあり、それに住んでた訳なん
だが……

まあ、説明しよう。

その日は探索に出歩いていた。

出来るだけ平地で……湖でもあるといいんだけど。

「……ん、あそこいいな」

そんなに神社から離れていない場所にいいところがあった。

「よし、早速準備だ」

「おい諏訪子ー」

「んー？」

「神社建て替えるからー」

咳き込む音が聞こえる。なんか食ってる途中だったか。
しばらくして、出てくる。

「なんだいきなり……」

「よく考えてみてほしい、ここ、立地条件最悪だと思うんだ

………ついでに原因は俺なんだが、本殿小さすぎて住めないんだよね」

山に登るわけではないものの、村から結構険しい道を登らなければ
ならない。

俺が建てたときはもう少し緩かったんだが……

その上、木が多い。すると、それほど大きくもないこの神社は隠れ
て見えない。

……あれ？村人何人が死んでね？これは大変だ、ということ。
もうひとつの理由は……まあそのまま。

「……確かにそうだね、でも、まず村人に相談しなきゃ。」

「そうだな、行ってきたくれ。もう場所は見つけたから、許可さえ
あれば建てるぞ」

暇になるのでくつろいでいると、諏訪子が帰ってきた。

「賛成もらえたよ、長く神やってないから自由に動けていいね」

「………そういえばお前何年神やってんの？」

「100年ぐらい？」

短い！思ったより短い！寝てた期間の50分の1じゃないか。

………そりゃあ土着してないわけだ。

「………まあ、必要なものは出しとけよ。壊すから」

「分かった」

俺は刀以外は特にいらないので置いて……

いや、幻実記は持って行こうか。

しばらくして、荷物抱えた諏訪子が出てきた。

「んじゃ行くぜー」

まずは保護の術式を解除。

んで、刀を自分に刺しつつ能力発動。……普通こんなことする奴いないよな。

何で能力が刺せば使えるのかというと、この刀は3億年近くにあつたから

その力をいくらか吸収していたのだ。万全にはならないが能力は何とか使える。

「よし消えた、刀は手に持てば操作できるように改良しないとな…

…」

「すごいね……」

続いて目的の場所到着。

「よし……」

今回は、時間をかけるわけにはいかなかったので能力で出す。

元の小さい物ではなく、いかにも神社なでかいものを建てよう。

「そいつ！」

フツと音もなく神社出現。

おお、最高じゃないか……と思いながら、俺の意識は途絶えた。

「…い、…えい…」

「おーい、流英ー」

「ん……？」

「あ、やっと起きた……出来たと思ったらいきなり倒れるから……」
「俺どのくらい寝てた？」

「3時間ぐらいだよ？」

「……随分と、短くなつたなあ……」

「ん？なんか言つた？」

「いや、なんでもない。それより、中はどうだ？何もなければ作らないと……」

「大丈夫だよ、普通に生活できる」

これで一安心だ。さて、しばらく刀改良に励むか……

この神社に住んで1ヶ月ほど。ついでに冒頭に戻る。
刀の改良は成功した。

依頼もちよくちよく来るようになった。少々大変だが。

そろそろ別の場所にも行つてみたいと思うので、その準備中。
自分でやつというのもあれだが、結構身勝手だよなあ。

「諏訪子ー」

「んー？」

「ちよつと遠出してくるから」

プフウと茶を噴いた音がした。

あれ、この前も似たようなことがあつた覚えが……

「いきなり何さ？」

「いやあ、ご存知のとおり封印されてたんで他の場所のことが分からんからな」

「ふーん……じゃあ私も付いていつていいかな？」

「神の仕事さぼらないならいいぞ」

「何かあれば呼び出されるようにしてあるから大丈夫だよ」

いつの間にやったし。

「そうかい。まあ念のため保護の術式は強めておくか」

「未だに術式はさっぱりだよ……」

「慣れればどうとでもなるさ」

ということ、支度完了。

「んじゃあ、行こうか」

「おー！」

相変わらず子供みたいだよな……

「む、何か今失礼なこと考えたでしょ」

「そんなことはない」

ついでに、無駄に勘がいいんだよな。

さて、やってきたのは諏訪子の領土から出たところにあつた森。
このまま抜けようと思ったのだが……

「おい」

「……だめだね、意識がなさそうだ」

「うーん……」

何をしているかというと、倒れている妖怪がいたのでどうしようかと。

金髪で多少長めの髪だ。少女、というのが妥当だろう。顔はうつ伏せなので見えない。

「……ん？」

と、ここで周りに気配を感じた。刀を構える。

「諏訪子、敵襲みたいだ。気をつけろ」

「わかってるよ」

それを感知していた諏訪子は既に鉄輪を構えている。

……そういえば諏訪子が戦闘するのは初めてだな。

「っ！ふっ！」

飛び込んできた敵の攻撃を避け、逆に攻撃を入れてやる。

3億年の歴史は伊達じゃない。その妖怪は消滅した。

「っ、強いね……」

諏訪子が微妙に震えながら、しかし隙は見せないようにこちらを見ている。

と、その時。

「うわっ」

周りにいたのが一斉に飛び出てきた。
驚きつつも、一体一体確実に仕留める。

6体目を倒し、いなくなる。

「ふう……」

「あー、面倒だね」

さて、さっきの奴を連れてくか……

歩いていくと、村に着いた。

「諏訪子、ばれると怖いから神力全部くれ」

「え？隠せばいいじゃない」

「隠してばれなかったら苦労しないってば……」

弱い神ならともかく、強い神だと一瞬ではれる」

「むう……仕方ないか。はい」

神力を受け取り、刀へ。

この刀の隠蔽を見破るのは相当な力を持ってないと無理だろう。
伊達に3億年かけてない。

「んじゃ、行くぜ」

村の中を歩いていると、神社が見えた。

ちなみに、背負ってきた少女は村の近くに家を建てて寝かせてある。

隠蔽をかけているので後で様子を見に行かなければ。

「なんか願い事でもするか……」

「私はいいや。というかあんた何でもできるじゃない」

「気分の問題だよ」

「よくわからないよ……」

神社到着。願いは無事に回復しますように……っと。

さて、もう少し見て回りますかね……

第7話：神社と遠出（後書き）

意見、感想等よろしければお願いします。

本当はどうか知りませんが、

この小説の神は、住んでしばらくいない限り自由に動けます。

第8話：神殴り妖怪仲間に（前書き）

タイトル通り。もしかしたら、無理やりな展開かも……
正確には神は殴ってませんが例えということで。

第8話：神殴り妖怪仲間に

視点：三人称

「…………ふむ」

流英が去った後、本殿の影から覗いている姿があった。

「妖怪でもなければ神でもない……人、でも無いだろうな……」

どうやら、流英について考えているらしい。
しばらく考えていたが……

「追ってみるか」

という結論。

視点Change：三人称 流英

諏訪子と合流し、適当に歩き回っている。

後ろのあたりから微弱な神力を纏った視線を感じるが、あえて気にしないことにする。

「まあ、これだけあればいいかな」

「そうだね、もう特に用事はないし……」

ところで今、他から見れば大人と少女が歩いているという危ない状

況だ。

しかも人通りが多いが、特に視線がこちらを向くことは無い。
まあ、別のものに見えるように術式を組んでいるからなのだが。

「そんじゃ、村を出る……前にだ」

「ん？どしたの？」

「さっきから後ろに何かいるんだよ」

「え？」

気づいてなかったか……神力に気づいてほしかったが。

「ちょっと話しかけてくる」

「え？ちよっ」

後ろを向いて、歩き始める。

向こうは見つからない自信があるようだが、残念、丸見え。
視線を向けないようにしつつ、そばまで寄る。

立ち止まり、肩に手を乗せる。

「もう少しがんばりな」

視点Change：流英 ???

「もう少しがんばりな」

それを聞き、私は啞然としてしまった。
見えなくなる術式は完璧だったはずなのに。

「え、あ……」

無意識に、そんな声を上げていた。

「大方さっきの神社の神様だろう？まさか神様直々に来るとは……
ありがたいね。」

迷惑かけちゃったみたいだから、送っていい？」

私は訳が分からないまま、神社に帰された……

神社まで連れて来られて、やっと意識を取り戻した。
私を連れてきたのは、若干長めの黒髪の男だった。どこか違和感を
感じるが……

後から付いてきたのは、茶色の長髪の女だった。こちらも、なぜか
違和感を感じる。

「だ、誰？」

……という容姿は後から分かったことで。
意識を取り戻したとき、まずそう言ってしまった。

「俺か？俺は刃流だ。人間……っても信じないだろうな。その様子
だと」

「私は勇子よ。私も人間って言いたいんだけど……」

少し遅れて。

「私は神奈子よ……この神社の神をやってるわ」

どちらも名前しか言っていないようなのでこちらもそれに習う。

「やっぱりね。そういえば、なんで俺らを追ってたんだ？」

「いや、人間でも妖怪でも無いみたいだから、気になって……」

落ち着いては来たが、まだ冷や汗が流れている。

「へえ、そこまで分かるのか……結構強いんだ」

何故か褒められた。

「で、あなたたちは結局なんなの？」

「そう簡単に教えることじゃない」

「あら……」

手始めに、神力を全部開放する。

普通の妖怪なら、これで潰れる。

「えっ？」

しかし。

女の方はきつそうだが、男の方は平然としている。

そう、平然と。まるでこの程度か、とでも言うかのように。

その事に無性に腹が立った。

……後から思えば、これが間違いだったのだろう。

「ちっ！」

「おっと」

力をこめて、御柱を飛ばす。

しかし、至近距離にも関わらず、掠りもせずに避けられた。
御柱で攻撃を続けるものの、当たらない。

「攻撃は、闇雲にするもんじゃないぜ？こつするんだ」

そう言い、懷から短刀を取り出す。
そして、投げた。

「！？」

短刀を見たとき、あの程度と高を括ってしまった。
しかし、目に見えぬ速さで迫る短刀に、御柱を構える余裕もなく。
ただ、刺さるのを待つ……はずだったのだが。

どうしてこの短刀は目の前で止まっているのだろうか。
そして何時……
あいつは私の後ろに回りこんだ？

「自分に向かってくるのは、1つとは限らないんだ。もっと、全体
を見るべきだったな」

訳の分からぬまま、私は意識を飛ばした。

視点Change：神奈子 流英

「……やりすぎたかなあ」
「うう、悔しい……」

神奈子は本殿の中に寝かせておいた。

諏訪子は……最初の神力に耐えられなかったのが悔しいのだろうか。

「まあまあ、普通はそうなるって」

「なんで流英は平気なのよう」

「生きた年月の違いだな」

ふっと昔を思い出し感傷に浸りそうになるが止める。

「さて、向こうもこつちも神なんだ。あんまり干渉せずに行こうか」

「そうだねー……っと、呼ばれちゃった。早すぎる気がするけど、じゃあね」

「確かに早いな……まあ、すぐには分かんが、いずれ戻るから」

諏訪子離脱。さて、ここから一人旅か……

「さて、出発……っと、忘れてた」

向かうは村の外。

ある場所で止まり手をかざす。

と、そこに現れたのは家。

「……まだ中か。大分弱ってたんだな」

中に入り、布団の中にいるのを確認する。

「おーい、いい加減起きてもらわんと困るんだが……」

「ん……んう」

お、起きた。

「あんまり動かないほうがいいと思うぜ」

「えっ……っ！」

忠告は遅く、既に体を動かそうとして痛がつていた。

「あーだから言ったのに……まあいいや、飯作ってくるから待ってな」

「……あなた誰よ？」

「流英だ」

そつえば、さっき神奈子に偽名言っただけ……訂正忘れてたな、まあいいか。

「何で私はここにいるの？」

「俺が連れてきたから。森の中でぶっ倒れてるもんだからなあ」

警戒している。まあ、当然か。

「別に俺を敵だと見るなら出てっても構わんど、まあ動けるのなら、だが」

「うぐぐ……」

睨み付けてくる。が、布団に包まっている状態でされてもかわいいだけだ。

さて、飯作るか。

完成。暇つぶしで鍛えた腕をなめないでほしい。

「さて、一応2人分作ったが……どうする？」
「いらな」

ぐう

「うぐつ、……もらうわ」

顔を真つ赤にしながら言う。

「毒見してやろうか？」

「いいわ。なんか悪い奴って感じしないし」

どういう根拠だ。

まあ、いいかな。

「そういえば、名前は？」

「ルーミア。闇を操れるわ」

「へえ……俺はさっきも言ったが流英だ。」

さて、自己紹介はこれでいいだろう。

「後は……これからどうするんだ？」

「……付いていつちゃだめ？」

「知らな……コホン。家とか無いのか？」

危ない、知らない人について行っちゃ（略）を言いかけた。

「無いわよ、もともと目的もなくふらふらしてるし」

「そうなのか。まあいいぞ、断る理由は無い」

そう、断る理由は無い。来るもの拒まず去るもの追わずの精神だ。

「んじゃ、よろしくな」

「うん」

おっと、そういえば……

「何で倒れてたんだ？」

「……強い妖怪にやられちゃったのよ」

「そうか」

「私からもいい？」

「答えられる範囲なら」

「あなたは何？」

「人でも妖怪でも神でもないって言つとくよ」

「……わからないわね、能力も効かないみたいだし」

「おいおい、もし効いたらどうするつもりだ」

「それまでのやつだったってことで」

「はははっ、面白いな」

家は出てちゃんと壊しておいた。

ルーミアが目を丸くしてこちらを見ていたが気にしないことにしよう。

第8話：神殴り妖怪仲間に（後書き）

感想、意見等よろしければお願いします。

ざっと見直したら、いくつか矛盾（というか伏線の回収し忘れ）っぽいのがあったので

いつかそれを解消するようにまとめて投稿します。

第8・5話：設定など（前書き）

設定資料集。といってもそんなにたいしたことは書いていませんが、若干変な部分は、これで解消できたかと思えます。他にあつたら申し訳ないですが……

ネタバレ等は含んでいないつもりですが、苦手な方は飛ばしても構いません。

ぶっちゃけ知らなくてもそんなに困らないことばかりですし。

後半、帰った後の諏訪子の話が短いですがあります。

第8・5話：設定など

- - - - 追記とか

人妖大戦争で地球を破壊するつもりという話があったが、あれは爆弾を大量に使用し……というものだった。しかし、流英が力を出しすぎたおかげで、全て消滅した。ということ。

ルーミアを入れた家は、入るときに透明化を解いたが、入ったらまた消した。
小さい家とはいえ、目立つのはよろしくない。

諏訪子は100年ぐらいしか生きていないのに、祠はもっと長くあった。

これは、封印自体は諏訪子が掛けたから。
もともとは祠のみで、封印は無かった。

- - - - 設定とか

最初以降話に出てきてない能力値数値化。

表に出ていないだけで実は結構進化してたりする。

そういうのを踏まえて流英（一般人時と刀使用時）のステータスはこちら。

まあ、一般人というのは本人が言うだけで実際はもう少し強いですが……

（一般人）

体力（一般人の体力を1000）：1800

霊力（一般人の霊力を100）：160

妖力（下級妖怪の妖力を100）：0

魔力（妖精の魔力を100）：0

神力（姿も無いような神の神力を100）：0

技術力（一般人の技術力を10）：10000

・詳細

強めの霊力、長年の技術力があるので一般人にはまず負けない。
その他は刀の中なので0。

神奈子に怪しまれたのは、長く生きたことによる微弱な威圧感を感じられたため。

普通の人間や妖怪には感じる事が不可能なぐらい微弱だ。

（刀使用時）

体力：4800

霊力：670

妖力：650

魔力：500

神力：8700

技術力：1250

・詳細

封印されている間も神力は増え続けていたため、膨大。
それ以外は回復途中。

技術力は力が増えた 必然的に出来ることが増える
ということであがっている。

妖力のための勝負なら中級妖怪を倒せる程度。

神力使つたらほぼ敵なしだと思う。
だが、そんなに出しても制御しきれないため、実際は全力で戦って
上級妖怪を倒す程度か。

こんな感じ。

技術力は、器用さやら動体視力やら攻撃方法やらが
いろいろ組み合わせられて出ているので、複雑。
簡単に言つと、単純な力馬鹿は低く、手数で攻めたり避けたり速か
つたりすると高い。

ちなみに、諏訪子。

体力：2100
霊力：400
妖力：0
魔力：0
神力：2600

詳細で書くことは特に無い。

妖力や魔力がないのは、神だから。

流英みたいにいるいろ持つてるほうがおかしいのである。

・流英の性格

一言で言えば優しい。

長く生き過ぎてそこまでいろいろ感じないというのもあるが、元か

らある程度優しい。

前世の精神はもう投げ捨てたため、（人間からして）多少外道な事程度なら抵抗が無い。

問答無用で殺しにかかるようなでもないが。

来るもの拒まず、去るもの追わずの精神。

何か理由がなければ、断るようなことは無い。

本人は、敵じゃなければ誰でも神社に住まわせていいと思っている。まあ、保護の術式が強すぎて普通はどうにも出来ないと言うのもあるのだが。

- - - 外伝：帰宅後の諏訪子視点

私が設定した呼び出しの反応があったので、神社へ戻る。戻ったところには、何人かの村人がいた。

「ああ、洩矢様……」

「何があった？」

「近くの山に、何かあるのです。近づくと倒れてしまうので、何かは分かりませんが……」

「ふむ……分かった、見てこよう」

ここで近くの山と言えば、他の山より全然高いあの山だろう。特に近づいたりしたことはなかったのだが……

まあ、行けば分かるだろう。

「これは……」

山のふもとまで来た。確かに、中腹あたりに強い霊力を感じる。
この感じだと、封印だろうか。

ともかく、近づいて……

「……え？」

どういうことだろう、発生源と思われるところまで来たら、突然感じる力が無くなった。

それと同時に、人が通れるぐらいの穴が開いた。

中から霊力を感じるが、これは封印ではなさそうだ。

「……本？多いな……」

奥にあったのは、本。正確には、大量の本棚と本だが。

適当に1つとってみる。そこまで大きくなく、表紙は青く、幻実記と書かれている。

適当な頁を開く。

1億1520万3681年目の10月7日

昨日に続いていい天気だ。が、少し暑すぎやしないだろうか。

まあ温度なんて俺には関係ないといったらそれまでだが。

まだ人間やめたくない……いや、精神を捨てたくないからな。

もう、記憶はほとんどなくなっている。

自分の元の名前はなんだっただろうか、身長はいくつだっただろうか。

まあ、思い出す必要は無いだろうから気にしないことにしよう。

……よくわからない。

しかし、どこか流英の字に似ている。

そういえば、あいつが毎日書いていた日記もこんなだったような……
まあ、帰ってきたら聞いてみようか。

神社に戻り、まだいた村人に、

「封印がかかってたよ。解いてあるから近づいて倒れることは無いけど、

やっぱり近づかないほうがいいと思うよ」

「分かりました、村のものにもそう伝えてきます」

そして、諏訪子は本殿に帰っていった。

第8・5話：設定など（後書き）

感想、意見等よろしければお願いします。

能力値はごちゃごちゃ言っていますが、要は流英強いです。

まあ、この設定は8話現在の話なので進んでどうなるかはわかりませんが。

第9話：見つけたものは（前書き）

妖怪でした、っと。

流英が後半年齢をカミングアウトしたり、少女の名前を出さなかったり、

若干無理やりかもしれませんがご了承を。

第9話：見つけたものは

ルーミアを連れて、来たのはやっぱり森。
しかし……

「あー、落ち着かん」

「何が？」

「お前にはわからんか。馬鹿でかい妖力を感じるんだよ、隠蔽されてるけどな」

「そうなの？」

「そうだ」

進んではいるものの、その妖力を纏った気配と視線は付いてきている。

神奈子のときとは違い、姿すら確認できないので気味が悪い。

「……そうだ」

とあることを思いつき、立ち止まる。

目を瞑り集中。すると妖力の塊……おそらく本体が確認できた。それを見つけたとたん、速攻で近づきぶん殴る。

「うぐっ」

すると、空中に穴が開き、俺は金髪の女性の顔をぶん殴っていた。想定外の事態に固まっていると……

「いたた……女性の顔は殴るものじゃないわよ？」

と言いながら出てきた。
ハッとし、警戒しながら。

「何の用だ？」

「興味深かったから観察しているだけよ」

「あれなんか微妙にデジャヴ……」

「なんのことよ」

「なんでもない」

「……敵意がないなら、行くぞ？」

「あら、確かに敵意はないわ。でもお願いがあるのよ」

すると、俺たちの足元にすつと穴が開いた。

固まっていたルーミアも、それに気づき身構えている。

まあ、落ちないんだけども。

俺は、常時能力遮断結界を貼っている。ルーミアにも同様。

死なないといってもきついものはきついのだ。

そして彼女の方かというと、

「なっ!？」

硬直していた。これで決めるはずだった技が効かなかったらまあそうなるよな。

「敵意がないなら行きますね」

「あ……あ……」

……行こうと思ったら俯いて泣き出してしまった。
そんなに悔しかったのだろうか……

「……しょうがない、連れてこよう。ルーミア、旅はここで終わりな
帰るぞ」

置いてくという選択肢は無い。そういう性格だから。

さすがに2人を連れて（しかもそのうち1人が担がれている）旅を
するのはきつい。

ということで、転移の術式を組む。

移動は楽になる。しかしめちゃくちゃ複雑なので使いたくなかった
のだが、今回は仕方ない。

半刻ほどして完成。既に霊力は使いきった。

「はぁ……疲れた。ほら、行くぞ」

ルーミアに言う。

「わかったよ」

その辺をふらふらしていたルーミアはそういい、こっちに来る。

その間、金髪の女性……よく見たら幼そうに見えるので少女は、泣
き止み寝ていた。

子供かお前は。

「あ、やっと帰ってきた！おかえり！」

「ただいま、諏訪子」

本当に神なのか疑うぐらい子供っぽいが、仕方ない。

「ちょっと2人連れて来たからな、部屋開けるぞ」

「え！？2人！？」

諏訪子がすごい驚いているが気にしない。

この神社、というか本殿は結構でかい。そして広い。

空き部屋が大量にあるので、何人が泊まるぐらいじゃない。ついでに内側から外に、必要以上に力が漏れないようになってるので妖怪がいるとばれる心配も無い。

余談だが、今まで俺がいろいろ継続するように作ったものは、全て術式で組んである。

術式は、解かれたり破壊されなければ無くなる事はないので俺が力を入れてたりはしない。

よって、いくつ術式を組んでも俺自体の力が消えることは無い。

転移については、能力を交えていたので霊力を使ったが……

いろいろやったあと、疲れていた俺は部屋に戻って寝てしまった。

次の日、元の世界で言う朝5時ぐらい。

俺は大体この時間に起きる。

そして日が昇るまで修行。

この流れは、封印されていた時以外ずっとやり続けている。

物事に限界はない。

いくら自分が強くとも、更に上を目指すことは出来る。

いくら自分が弱くなっても、元に戻る努力をすることは出来る。

……という考えの下にやっているつもりだ。

回復なら素直に寝て待てと思うかもしれないが、そんなことやってたら10万年経っても回復しきらない。
なら、今の素をそれと同じにしまえばいいということ。
これはほぼ成功し、もう既に半分は取り戻せている。

「おーい、起きろー」

それが終わったら、全員を起こしにかかる。
早起きをするつもりはないらしい。

諏訪子、ルーミア、源想はすぐに食堂に集まった。

あの少女も無理やり連れてきた。

理由は、起きなかったから。この感じだと、普段めっちゃ寝てるな？

「おはよう、早起きは健康の元だぞ？」

「うゝ……私は眠いのよ……」

昨日の雰囲気はどこへやら。寝起きに弱いのか。

「まあ、とりあえずいただきます」

「いただきます」

源想は実は人化できたりするので、特に不自然な点は無い。

飯が食い終わったので、ルーミアと少女を呼ぶ。

「で、どうするんだ？帰りたいなら帰ればいいし、居たいなら居てもいい。

俺に敵対するならそれでもいいぞ」

「私はここにいていくって言ったもの」

ルーミアは即答。

「私は帰るわ……一つ聞きたいのだけれど」

「なんだ？」

「私の式になる気は無い？」

「……多分なろうとしてもなれないぞ？」

「え？なぜ？」

「弱い。なろうとしても力量の差で跳ね返しちゃうよ」

「えっ……だって貴方からは小さな霊力しか感じないわよ？」

「この刀に全部入ってんだよ」

へこんだ。まあこんな単刀直入に言えばそうなるか。

とはいえ、話したことも事実。確かに今の霊力なら負けるが、妖力を全部出せば勝てる。

というか、普通の人間よりはでかめの霊力なんだが……それに気づかないならどうしようもないな。

「……帰るわ」

「そうか、じゃあな」

あの穴を使つてどこかへ行った。よく見たら、目玉が大量に見えた。気持ち悪い。

まあそんなこんなで、現在の神社の住民は俺、諏訪子、ルーミアの3人。

……神社で住民つてのもおかしい話だな。

刀を調整していると、諏訪子に呼ばれた。

「なんだ？」

「帰ったらね、村人に近くの方が変だって言われてね……」

「……ああ、それ俺のだ」

「そうなの？」

「ああ。懐かしいな……あそこ、前の神社建てる前の住居だったんだ。」

「……随分大量にあったけど、そういえば流英って何歳なのさ」

「うーん……あんまり言いたくはないんだが、まあどうせばれるだろうし……」

ちよつと間を空けて。

「１０億ちよつとだ」

「うええええ！？」

泡吹いて倒れた。そんなに衝撃的だったか。

まあ、誰でもそうなるか……もとの世界の俺でもそうなる、と思う。

第9話：見つけたものは（後書き）

感想、意見等あればよろしくお願いします。

もちろん、少女とはいずれ再会します。名前もその時分かります。

まあ、既に分かる人も多いとは思いますが……

第10話：湖と修行（前書き）

木曜日にあげたかったのですが、時間の関係で無理でした。

第10話：湖と修行

いやまさか、気絶されるとは思わないだろう。

ここで既に10億という事実には驚かない時点で俺はもう末期なのだろうが。

まあ、そんなことは置いて。

それがあつてから2年ぐらい経ったときだろうか。

どうやら俺の元々住んだ山（以降勇山）の向こうに湖が出来ていたらしいのだ。

いつからあるのか知らんし、この神社の隣にも湖があるので珍しいものではないが……

まあともあれ、見に行くとする。

既に諏訪子に伝えてあるので、今回は源想と行くことにした。
ついでに……

「なあ源想」

「なんじゃ」

「なんでお前1日にそんな寝られるの？」

「もう年をとったからのう」

「お前不老だろうが」

「いや、そうでもないぞ。あくまで擬似的なものだからのう」

「あれ、そうだったのか。てっきり不老不死かと」

「……思えば長く生きたのう。もう、目がよく見えんわい」

「おいおい、悲しい事いわないでくれよ……」

「事実じゃからの、仕方なかるう」

「うーん……」

意外と衝撃的なカミングアウトを聞きつつ、俺たちは湖へ向かった。
歩くこと5時間ほど、2刻ぐらいだろう。
やっと付いた。

「しかし……これは……」
「すごいことになったのう」

何があるかというと、霧だ。
霧が深く、3メートル先も見えない。

「……この霧、魔力だな」
「む、そうなのか？」

よく感じてみると、これは魔力だ。ということは……

「妖精がいるのか」
「そう、ここは妖精がいつぱい住んでるのよ」
「ふーん……どうしようか、そついえば特に用無いんだよね」
「何も考えておらんかったのか」
「だって湖見たかったけどこの霧じゃなあ」
「じゃあ晴らしてあげるわ」
「おお、そうか助かる」
「それじゃいくよ」

どんどん霧が晴れていく。

……ん？

「そついえばお前誰だ？」

「今更！？何か悲しくなってきたんじゃない……」

「まあまあ、気づいてよかったじゃないか」

「そういう問題じゃないのよ！あたいはチルノよ！」

「チルノか。俺は流英だ。妖怪か？」

「あたいは妖精よ！」

表情がコロコロ変わって面白いな。

長めの青い髪に青い瞳、青いワンピースに透明な氷の羽のようなものと、

青尽くし。綺麗だ。しかし、今は秋ごろなので寒く感じる。

しかし、これで妖精か……

妖精は通常魔力か妖力を持つてるものだが、チルノからは両方感じることが出来る。

結構強いし。ついでに、普通の妖精は会話能力を持たないということもある。

「それで妖精か……」

「うっ……」

なんだ？突然涙目に……

……まさか。

「まさかとは思いが……」

「そ、それ以上は……やめてあげてくれませんか？」

「ん？」

声のほうに顔を向けると、こんどは長めの緑色の髪で青い瞳、青いワンピースに薄い羽と

言葉で拳げるとチルノに似ているが、なんとなくだが雰囲気が違う

妖精がいた。

これまた知能が高そうだが、まだ大妖精といえは収まる程度だろう。で、ここで口を挟んで来るということは……

「……ああわかった、まあ見たいもんも見れたし、帰ろうかな」

「え？は、はい、わかりました。お元気で……」

優しいな……そういえば源想どこ行つた？

「……何やってんのお前」

探してみると、湖を覗き込んでいた。

「……多分この湖は7億年前ぐらいからあるぞ。だが、わしもこの場所にあつたのは見たことが無い。

だから多分、移動してきたのじゃろ」

「え？マジ？」

「本当じゃよ、お主もよく見てみるといい」

水に親近感つて何だよ……とは思つたが、とりあえず覗いてみる。

……ん？これはまさか……

「ああ、うん、そうみたいだな」

「どうかしたかの？」

「いや、なんでもない。さて、帰るぞ」

「随分はやいのう」

「目的は見るからだからな」

「ねえ流英」

「なんだ？」

「手合わせしてくれない？」

「なんでまたいきなり」

「強くなりたいのよ」

「へえ。お前を倒した上級妖怪に復讐にでも行くのか？」

「そんなつもりは無いわよ。ただ、自衛能力ぐらいはあったほうがいいでしょ？」

「まあそうだが……」

帰って早々ルーミアにそう言われた俺。

ぶっちゃけ困る。

いや、手合わせが面倒とかじゃなく。

戦闘なんて最近まともにやってないし、ルーミアの強さがよく分からない。

加減を間違えてやらかしたなんで勘弁したいからな……

「じゃあ、俺は人間として戦わせてもらおう」

「人間って弱いじゃない」

「人間の技術力なめちゃいかんよ？成長も早いからな」

「まあいいわ、広い場所に行きましょう」

ということ、俺は刀を引っ提げていい場所を探した。

ここなら良いだろう。

「よし、俺はこの刀一本でやるからな。

あと、間違っても折ろうとか考えるなよ？お前の腕が折れちゃう」
「わかった、さあ行くよ！」

もちろん刀は絶対に折れないだけの普通の刀だ。
俺は完全に人間として戦う。

今出せる全速力で走り、刀を振りかぶる。

しかし予想していたのだろう、後ろに下がり避けられる。

だが、こっちだってわかっている。その低い姿勢で前に走り、横に振り切る。

驚いたのか一瞬固まり、当たる。

しかし相手は妖怪、あまり痛くなさそうだ。

追撃を入れたかったが、それを許してはくれない。いやな予感がし後ろに下がると、

元の場所に黒い弾が何発が飛んできた。

「あれ、当たると思ったんだけどなあ」

「全然効いてなさそうだな……」

弾幕を避けつつ、近づいていく。

……ここだ！

隙間を見つけ、一気に接近する。

が、それは罠だったようだ。刀を振ろうとした瞬間、弾幕が当たり吹き飛ばされる。

「ぐっ……」

己の体は己の力、ということとで霊力がちよびとあるだけの俺には大ダメージだ。

立ち上がるとルーミアが目の前におり、何時出したのか黒い剣を振りかぶろうとしていた。

刀で対抗する。鏑迫り合いだ。

くっ、力じゃ勝てない！

大きく後ろに跳び、回避する。

しかし攻撃は止まない。避け、防ぎとやっていく。

埒が明かないので、弾くつもりでやってみる。

と、横から振ってきた。これを刀に中てて向きを変えさせる。弾くのは力不足だ。

向きを変えられて一瞬バランスを崩したその隙に刀を突き出す。

グサッ

見事に腹に刺さる。

「うぐっ……っ」

引き抜き、少し様子を見る。敵意が引いたのでこれで終わりだろう。しかし、普通の妖怪ならすぐに回復するぐらいの傷なのだが……

「……大丈夫か？」

「うつつ……」

ちよっときつそうだ。妖力で治療する。

「これでいいだろう」

「あーあ、負けちゃった」

「しかし何で傷が治らない？」

「……話すと多少長くなるんだけど」

「構わん」

本当に長くなったので要約すると、ルーミアは妖怪として少々異端

らしい。

妖力の成長が早いことやさっきのように傷が回復しない、妖力を何故か攻撃にしか使えないなどだ。

普通妖怪は寿命故に成長が遅いものだが、それが速いようだ。

しかも、妖力を何故か攻撃にしか使えずそれ故に回復も出来ないのだろう。

普通は妖力を使って生活するので、明らかにおかしい。

「ふむ……妖力は、修行で何とかできるかな」

「え？ 本当？」

「どんなに変だとしても妖力は妖力、元は同じだ。

偶々ルーミアの妖力が攻撃的だっただけで、努力しだいで何とかなれると思うぞ」

そのときのルーミアの顔はすごい眩しかった。

希望が見出せるとうれしいよね、うん。

成長云々は……力に制限をかけるのが一番楽だろう。それ用のリボンでも作っておくかな。

気がついたら日が暮れていて、手合わせのことを伝えるのを忘れていた俺たちは

諏訪子に全力で文句を言われる羽目になったが、それはまた別の話だ。

第10話：湖と修行（後書き）

感想、意見等あればよろしく願います。

次の話は、8・5話で言い忘れたことをやります。

第10・5話：言い忘れたこと（前書き）

タイトル通りです。

第10・5話：言い忘れたこと

Q 流英ちゃんと世界神の仕事してんの？

A してます。一部については自動でやらされています。

・詳細

現実と幻想を司る程度の能力になったとき、その世界の情報が全て流れてくるようになりました。

理由はなんと言うか、操るの時点では世界と同レベル、つまり指示は出せるけど

基本的に世界全体で自動的に処理してました。

司るになると世界の中心、つまりは下（世界中）からいろんな情報が入ってくると。

現在流英は情報がある程度遮断してオーバーフローしないようになっています。

ちなみに、世界神の仕事というのは保つことです。

別に全手動ではなく一部自動ですが……

世界の状況を把握し、それを保つ。もちろん、別に保つとは縛り付けることじゃありません。

世界は過度に変化を求めようとするので、歯止め役が必要なのです。で、実は流英、式のようなものを4人作っています。

ぶっちゃけ世界中担当とか無理です。広すぎます。

そういうことで、現在の流英の担当地域は日本の辺りです。

そんな面積で4人で足りるのかと言いますと、その4人も多分式が作れるので大丈夫だと思います。

どうでもいいですが世界神は神だけど神じゃないです。
神でも否定は出来ませんが、分類上は世界神という感じです。

長々と独自設定でした。この設定が本編に出ることはおそらくない
と思われます。
矛盾もどき解消ということで。

Q 人の説明が力しかないんだが？

A わすれてました、ごめんなさい。

・詳細

名前 刃勇 流英

種族 世界神

年齢 10億5000年ほど（約10億歳）

能力 現実と幻想を司る程度の能力

性格 温厚（感情が枯れかけとも言つゝ、要するに爺）

一人称 俺（状況によっては稀に私）

二人称 お前・貴様・名前・等

三人称 あいつ・等

元はいたって普通の高校生。特別頭が良い訳でも悪いわけでもなかった。身体能力も同じ。

過去に大きな出来事にぶつかったことも特に無い。

なので、何で創造神に選ばれたのか分からない。ぶっちゃけ偶然なのだが。

転生後は本能から無意識に仕事をしていた。チート能力使っているいろやってるのがほとんど。

が、修行は欠かさずやっていたため恐ろしい量の力を持っていた。故に刀を作ったのだが……

あの人妖大戦争を終わらせるため、100万を超える人間や妖怪たちの中に飛び込み全滅させた。

しかし溜め込んだ力も、100万の強い奴を全滅させようと思えば無くなってしまう。

己の力は己の体ということで消滅しかけていた流英はそのまま5000年の眠りにつく。

大きすぎる力は無くなったため刀は意味をなくしたように思えたが、ある程度力を吸収していたため回復の手助けに。

しかし今のところ本人は人間として生きている。技術力がおかしいので既に人間離れしているが……

来る者拒まず去る者追わず。敵意がなければ誰に対しても友好的に接する。

逆に言えば、敵意があるなら本気を出す。しかし殺しはしない。

改心して付いて来るようならそれでいいし、どこかに帰るというならそれでもいい。

いつか、10人を越える大所帯になる気がするがまだ先の話だろう……多分。

他の登場人物や設定についても書きたいですが力尽きました。また
いずれお話します。

第10・5話：言い忘れたこと（後書き）

力尽きました。ごめんなさい。

一つのことを必死に考えると疲れますね……

第11話：さあ修行だ！（前書き）

今回は短めです。相変わらずの無理矢理展開……

第11話：さあ修行だ！

そういえば、ルーミアはこうだったが、諏訪子はどうなんだろうか。そんなに長く生きてないようだし、何かしらあってもおかしくないのだが……

「なあ諏訪子」

「なにー？」

「単刀直入に言うんだが……修行しない？」

「ああうん……ってええ！？」

おいこら遅いぞ。

「よしじゃあ3にん」

「ちよつと待てやああああ」

「そんな言葉遣いするなよ……」

「お前のせいだよこの野郎」

「うわあひでえ……はどうでもいいから、どうなの？」

「むう……んー……」

考え始めるあたりやはり何かあるんだろう。

「……ああそうだ、術式を教えてやろっ」

「え？ほんと？」

すごい今更なのだが。すっかり忘れてた。

「やる気があるならいいぞ」

「やるに決まってるじゃない！こればかりは自分だけじゃ何も出

来ないのよ……」

一人でやった俺はいつたい……あ、俺が術式作ったんだった。
要するにあれか、誰かが俺が寝てる間に俺の術式を読み取ったのか。
……あれ？そいつすごくね？

「……まあいいや。ルーミアも一緒にやるからな」
「わかったよ」

この諏訪子、もうルーミアに抵抗が無い。妖怪なんだがな。

ということで、広めの部屋に移動。

壁が強化してあるので失敗して爆発しても心配は無い。

「よし始めるぞ。ルーミアも俺のやつは基本が術式だからやっ
くようにな」

俺は、何をやるにも能力を除いて術式ばかり使っている。

単純に力を使うのは滅多にやらないなそういえば……

まあつまり、俺の修行は術式が基本。覚えてもらわないと困る。

術式というだけあって数学みたいなものだ。

基本さえ分かれば、後は応用が効くからな。

「じゃあ、まずは式の作り方からだ。力を精密に操らんと無理だぞ」

簡単なものならともかく、それ以上になると結構精密に力を操れな
ければ無理だ。

だから、多分鬼とかは無理。

大体3時間経っただろうか。なんとか、ある程度精密に出来るようになったようだ。

「まあ疲れただろうし、今日これでお終いだ。」

「なんで出した力は少ないのにこんなに疲れるのよ……」

2人ともすごい疲れているようだ。

ぶっちゃけ普通に全力出すよりも疲れるからな……

その分、できれば強いのだが。

「仕方ない、そういうもんだ」

「あー体あんまり動かしてないのに筋肉痛になりそう」

「同じく……」

「まあまあ。それに、ちょっと諏訪子にはがんばってもらわないと

……」

「え？」

「いや、こつちの話だ」

まだ噂で聞いただけなのだが、今大きな国を治めている大和の神がもうすぐこちらへ来るようなのだ。

あくまで噂、何時来るかは分からない。

だが、来ないことは無いだろう。聞けば、大和はどんどん国を広げて行ってるそうじゃないか。

当然兵力での勝負もあるだろうが、何より怖いのが一騎打ち。

大和の方は長く生きたものが多いかもしれない。

が、こつちはやるとなれば諏訪子だ。

神社を建てたのは俺だとしても、この国の責任者は諏訪子だ。

幸か不幸か、諏訪子はこれを知らない。だから、気楽に修行できる。緊張してたらできる修行も出来なくなるからな……

「……おい？大丈夫？」

「ん、あ、ああ、大丈夫だ」

おっと、それに集中してしまった。危ない危ない……

それから1年か2年経った。まあ幻実記の厚さからして2年だろうか。

遂に大和に動きがあった。

「……」

「……」

俺と諏訪子は、1つの部屋で沈黙していた。

「……あーうー、どうして教えてくれなかったのさ」

「今回は事がでかすぎる。教えたら修行にならん」

「うー……」

「そんなことより、来てるんだろ？交渉しようって。する気も無いのに、よくやるよ」

「うん……」

「その使者なら、俺が行くから。戦いの準備をしといてくれ」
「わかった」

交渉は、もちろん決裂。まさかあんな理不尽な条件吹っ掛けてくるとは思わなかった……

不安。それしかない。

なんて言ったって、相手はあの大和だ。

もちろん自信がないわけじゃないけど、自分の国と大和なんて、比べ物にならない。

「はあ……」

「おい、大將がそんなんじゃない、ある士氣も無くなっちまうぜ？」

「そう言われてもね……」

「まあまあ。俺自身が戦に関わる氣は無いが……」

そこで言葉を止め、懷から何か透明な石のような物を取り出した。

「いざとなったら、これを使いな。適当に神力流し込めばいい。きつと役に立ってくれるさ」

「え？うん……」

よく分からなかったので、適当な返事をしてしまった。

関わる氣が無いと言うのは、悪く言えば無関係だから、だろう。

流英は偶々ここに神社を建てただけで、この国を治めているわけじゃない。

その氣になれば全ての国を治めるとか普通にしちゃいそうだけど……今はどうでもいい。

「まあ、行つてきな。最悪な事態になったら、俺も入る」

「……うん」

戦闘開始まであと1刻ほど。ミシヤグジを集め、準備を整える。

苦しい点は、数が少ない事だ。個々の強さに自信がある少数精鋭だが、

数の暴力に勝てるほどではない。ましてや、大和などとなれば多数精鋭の可能性も……

「……今は考えないことにしよう」

大将の心構えは伝わる。こんなでは、士気が下がってしまう。とはまあ流英の言葉だけど……

……よし

「……行くよ！」

戦場に到着した。一番前にいるのは、この前の神だった。流英が気絶させた奴だ。

「我こそが八坂神奈子だ！おとなしく降参しろ！」

「断る！我こそ洩矢諏訪子、行くぞ！」

そうして、私は戦場へ突っ込んで行った。

第11話：さあ修行だ！（後書き）

感想、意見等あればよろしくお願いします。
次回から諏訪大戦に入ります。

第12話：いざ出陣、諏訪大戦（前書き）

遅くなって申し訳ないです。

あと、活動報告でも言いましたが……

今更ですが、独自設定超注意。はい、ごめんなさい。

第12話：いざ出陣、諏訪大戦

視点：流英

「おー、始まったな」

遂に始まった戦。この2年で、諏訪子はどれだけ強くなったのだろうか……

ざっと見た感じ、数は洩矢と大和で4：6ぐらいだ。下手すると3：7ぐらい。

確かにミシャグジは強いが、それでもこれはきついな……

今回、俺は関わらない。国の主とその僕が戦うべきだろう。

「まあ、あれもあるし、勝てないかもしれないけど死にはせんだろう。」

「……そう思わないか？その奴」

「……やっぱりばれるのね。悔しいわね……」

呼びかけて出てきたのはこの前の金髪少女。……ただと多すぎて分からんな。

服は紫が主で、なんとなく胡散臭い雰囲気を出している。

「ところで、名前を教えちゃくれないか？いつまでもお前呼ばわりはいやだろう」

「……八雲紫よ、貴方は？」

「刃勇流英だ……にしても、改めてみると随分強いんだな。妖力が半端無い」

「私はそれにびくともしない貴方のほうが驚きだわ……式に欲しい

わね」

「もつと力をつけてから言っただな」

「恐ろしいわね」

一息つく。ちなみに、高い山の上から見ている。

「なあ八雲、そこまで式が欲しいって言うのは、何か目的でもあるのか？」

「紫で構わないわ。……理想があるのよ」

「ほう？」

「人間と妖怪が共存する場所の創造よ」

「……なるほどな。だが、今は無理だな」

「何故かしら？」

「そもそも今は、人間と妖怪は狩り狩られる存在だ。……5000年前だってそうだったんだから」

「え、5000年……？」

「後で気が向いたら話す。もう一つ、共存の定義はなんだ？」

同じ村で暮らすぐらいなのか、村を訪れても平気なぐらいなのか。ある意味、今の狩り狩られるのも共存だしな」

「そこまで深く考えてなかったわね……」

果たしてやる気があるんだろうか……っと。

「まあ、返答はまた今度な。ちょっと行ってくる」

俺は戦場へ飛んでいった。

私達は、苦戦していた。

戦える奴は最初の半分以下になり、その誰もが傷を負っていた。私も例外ではない。

何とか相手も減らしたが、このままでは押し負けてしまう。

……使うしかないのだろうか。

卑怯かもしれない。だが、流英はルールはしっかり守る男だ。何か、仕掛けがあるのだろうか。

……と悩んでいる時間はなさそうだ。

懷から玉を取り出し、神力を籠める。

「……っ！」

すると、一瞬光ったかと思うと目の前に女性がいた。

よく分からないまま諏訪子が見ていると。

シュッ

「危ないですわよ？」

何やら刃物を投げたようだ。

そしてそれは、私の後ろに来ていた敵の頭に刺さっていた。

一瞬感心して啞然としかけたが、すぐに戦闘に戻る。

それからも自分は鉄の輪と神力で組んだ術式で戦っていた。さっきの彼女は、相変わらず刃物を投げている。

しかし手際がいいどころではなく、同時に3本投げたりしているの
でまるで踊っているようだ。

……そして今気がついた。彼女は、今私の僕扱いらしい。感覚で分

かる。

流英も、めんどくさいことするねえ……ここまでするなら本人が来てもいいんじゃないかい？

彼女が加わった後、なんとか平等になった感じだ。

このままだと、最終的には……と、その時。

「洩矢神」

「っ、なんだ」

その声で敵の攻撃は一瞬にして止んだ。それに答えるようにこちら
の軍勢の攻撃も止んでいたが。

「一騎打ちだ、これ以上被害を出すのはお互いに悪いだろう？」

「……それもそうだね、いいだろう」

……今私が考えていた事を向こうから言ってくれるとは。
勝っても負けても、被害は絶対に少なくなる。
負ける気は、さらさらないけど。

視点Change：諏訪子 流英

俺がついたとき、そこは決闘場だった。

それぞれの軍勢は大きな輪を描き、その真ん中に諏訪子と神奈子がいる。

その間には結界があるようだ。そんな技術を持った奴が敵か味方にいたのか……

しかし、こんな脆くては危ない。

「……よつと」

結界を潜り抜け、その上で結界を補強しつつ不可視になって2人の目の前に来た。

自分自身も結界が貼ってあるので、まあ安全だろう。

「改めて言おう、我こそが大和の神の一人、八坂神奈子だ」

「こちらも改めて。我こそが洩矢神の洩矢諏訪子だ」

おー、丁度名乗りを上げたところか。

諏訪子には教えられるだけの技術を教えた。

ぶっちゃけ急ぎ足だったので不完全なものいくつかあるが……
理想としては勝ってほしいが、相手のこの感じからするとまずいか
もしれんな……

最悪でも、死ぬことは避けさせなければ。

まあ、成果を発揮してもらおう。

あ、そういえば召喚されたあいつどこ行ったかな……

「お呼びで？」

来たし。敏感すぎるだろ。

「俺はこの戦いを見るからな。帰るなら、帰って構わん」

「そうですか。では、申し訳ないのですが帰らせていただきます。
仕事が多いので……」

「ははは……ご苦労様。いやあ、きついねえ俺らは」

「……非常に楽しめているように見えるのですが。まあ帰ります。」

さあ、決闘の始まりだ。

視点Change：流英 三人称

始まってまず先を取ったのは諏訪子。

両手に鉄の輪を構えつつ、素早く神奈子に迫る。

ここまで速いとは予想していなかったのだろう神奈子は、直撃とは言わずとも当たっていた。

「チッ」

神奈子は、舌打ちをしつつ御柱を……ブン投げた。

諏訪子はそれに対し、能力……” 坤を創造する程度 of 能力 ” で、目の前に巨大な土壁を作る。

そのまま土壁を神奈子に飛ばす。が、神奈子は既にいない。

「こつちだよ」

「ッ！」

間に合わないと思った諏訪子は避けずに即席結界をはる。

しかし、即席の脆い結界は御柱によりすぐさま崩れ、当たる。

多少勢いは殺せたが、それでも厳しい。

その隙を見逃すわけなく、神奈子は次々と攻撃していく。

諏訪子はその御柱の弾幕を避けつつ、術式の掛けられた鉄の輪を投げていく。

だが。

投げられたのを確認した神奈子は、少しにやけつつ手をかざした。すると細い植物の蔓が鉄の輪に飛んでいく。蔓に当たった鉄の輪はたちまち錆びてしまい、神奈子に当たってもなんともなかった。

「なっ……！？」

それを確認し、思わず止まってしまふ。

そして、気がつけば諏訪子の目の前には御柱があった。

込められている神力に驚く暇もなく、直撃した。

無防備な状態で耐えられるものではない。諏訪子は、意識を失い倒れた。

視点Change：三人称 流英

「くっ……」

相手のほうが上手だった。俺は鉄の輪を固く、鋭くする術式しか教えていない。

つまり、錆びることに耐性が全くないのだ。

悔しい。自分のことじゃ無いのに、何故か悔しい。今なら親の気持ちに分かる気がする。

しかし、今は目の前のあれをどうにかしようか……

結界と不可視を解き、両者に近づく。

神奈子は、諏訪子に止めを刺そうとしているところだった。

「できれば、そこまでにしといてやって欲しいんだが」
「っ、誰だお前は」

止めの為の、どこから出したのか分からないが持っていた刀をこちらに向ける。

「忘れるの早過ぎないか？俺は交渉にいった使者だ」

「今更何のようだ、こいつの命乞いでもしに来たか？」

「その通り。いなきや困るんでね。……お前にも、な」

「どういうことだ？」

「生かしておけばすぐ分かんと思うよ？お前はすぐ信仰を得ようとするだろうし」

「くっ……」

今までこの国の、ミシャクジ様を統括していたのが諏訪子だ。

俺は見た目のせいもあって時々忘れてしまいが、れっきとした一国の王だからな。

んで、そのミシャクジの祟りは恐ろしい。これはなかなか忘れられないと思うぞ……

まあ要するに、信仰の対象は移らないだろうということなのだが。

「お前は何だ？」

「さっきもいつ」

「違う、何なんだお前は。人間では無い。だとすれば妖怪か？」

「どれでもないさ。まあ……人間って言うておこうかな」

よく見ると、怒りやら恐れやら複雑な表情だ。

まあ確かに強めの神力がちくちく当たってたけど。反応したほうがよかったかな……

「王より強い僕があつてなるものか！」

「何を言うか、おれは僕じゃない。もし僕なら、俺はこの戦いに参加していたさ」

「……ならお前は何だ？」

「成り行きで神様と友達になっちゃった人間だ」

ますます意味が分からんという表情になっていき……
ふっ、と顔を上げ。

「……私と勝負だ。お前が勝てばこいつを生かそう」

「いいぞ、まあ、せめて死なないでくれよ？」

この提案に喜ぶ自分がいた。

実は先ほどから、戦いたかったのだ。

戦いを見てきて、その欲が増えてきた。

本当は全力出したいが、さすがにまずいだろう。

……俺は戦闘狂じゃないんだがな……

一方神奈子はイラついているようだ。

確かに誇りを傷つけるようなことばかり言ってたな俺。言葉遣いも。

反省反省。

「……我こそ洩矢神の交渉の使者を務めた刃勇流英なり」

「3度目ね……我こそが大和の神の一人、八坂神奈子だ」

さて……楽しもうかね

第12話：いざ出陣、諏訪大戦（後書き）

書きたいことは浮かぶけれど、いざやるとなると言葉に出来ない。
今回はそれが出まくなって時間かった……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5079x/>

東方幻実神

2011年11月24日19時53分発行